



平成26年度 秋期企画展

白山曼荼羅－描かれた神々と觀音信仰－

白山一冬のよく晴れた日、高いところに登れば福井市内からでもその白く神々しいすがたを拝することができます。この山には三つの峯に住まう三神をはじめ、さまざまな神々の集う場所もあります。では、白山に住まう神々はどのようなおすがたなのか?それが今回の企画展のテーマです。では、展示内容にしたがって少しだけご案内いたしましょう。

一、越前に広がる 觀音悔過の世界

觀音信仰は仏教が日本に伝來した飛鳥時代からおこなわれている古い信仰ですが、十一面觀音等変化觀音に関わる經典が伝わった奈良時代以降、国家や地域を守護する役割を担い、さかんに造像されます。「お水取り」で知られる奈良東大寺二月堂修二会は、この時代の觀音信仰を現代に伝えています。心身共に清らかな僧が万人の罪を觀音菩薩に懺悔し、国家と万人の福德へと祈りを転ずる、「悔過」と呼ばれる法会は、奈良から平安時代にかけ、都のみならず各地でも盛んにおこなわれました。觀

音への悔過が越前でも盛んにおこなわれたことは平安時代以降の優れた觀音像が多数伝来していることからわかります。今回の展示では二上觀音とともに知られる鯖江市有定町春日神社の十一面觀音立像(県文)がお出します。本像のチャームポイントといえる高い髪や直立不動のすがたは奈良時代の觀音像を彷彿させます。神社では拝見の難しい側面や背面も必見です。

觀音への祈りを捧げる場所は、清らかな山が最適とされました。禁足地とされた山こそ人間による汚れを受けていない清



県文 木造十一面觀音菩薩像(鯖江市有定町春日神社)

らかな場所でした。修行者は、觀音への祈りの成就を願い、「神の山」へと分け入りました。福井市大安寺の十一面觀音菩薩立像は、目が彫刻されていない異形の觀音像として「神の山」での祈りを想像させるお姿です。

觀音菩薩への国家守護の祈りは、やがて地域、さらに各集落を守護することを目的とされました。福井市坪谷白山神社の聖觀音菩薩立像や滝波五智如來堂の觀音菩薩立像は、現在集落の中心に位置する神社・堂宇に祀られていますが、本来集落の出入り口や境界にあたる山中の觀音堂に祀られていたもので、「守護の觀音」の例としてご覧頂きます。

山での觀音への祈りは、より清らかな山の奥へ。このような山の修行者のヒーロー・泰澄はより強い觀音の力を求め、神々の住まう山=白山へと向かいます。

二、国神神社本に見る 白山馬場の空間

白山修行者はまず馬場と称された拠点に集結し最初の祈りを捧げ、旅装を整えます。越前馬場である平泉寺白山神社のようすをビジュアルに伝えるのが、国神神社の絹本著色白山曼荼羅図(県文)です。そこには神の坐す本殿を中心としながら仏教側の中心堂宇として講堂、天台宗で重視された常行堂、仏舎利あるいは經典を祀った塔などの多数の仏堂が周囲に描かれた、神仏習合の空間でした。ここでは平泉寺と共に越前白山信仰の拠点であった豊原寺伝来の仏像群を中心に曼荼羅に描かれた「白山馬場」

空間」を体感して頂き、神々の世界=白山へと至るはじまりとします。



県文 絹本著色白山曼荼羅図 部分(坂井市国神社)

三、神仏の集う 白山曼荼羅の世界

はるかに望む白山に坐す神、泰澄が出会った白山の神とはどのようなお方がたなのか?いよいよ白山の神々の登場です。

日本の神々は、本来すがた・かたちを持たない存在でしたが、異教である仏教と触れ、平安時代初期、はじめて彫刻あるいは絵画により視覚化されるようになりました。その後、神・仏は急接近し、神々には正体とされる仏(本地仏)が配当され、神仏習合はピークを迎えました。ところで、1つの神社には主神の他、配偶神や子供神、関係神はては眷属衆に至るまでたくさんの神々が祀られています。これらの神々を一目で拝めるようにまとめたものが神道曼荼羅です。「曼荼羅」とはインドのサンスクリット語で本質や集まりを意味し、密教で重視されますが、まさに神々の集まりを一つの画面に集約しています。神道曼荼羅には神々の姿を描いたもの(垂迹曼荼羅)、神の正体とされるほとけ(本地仏)のすがたで描いたもの(本地仏曼荼羅)、さらに神仏両方の姿を描いたもの(本迹曼荼羅)などがあります。また、社寺や靈山の様子を描いた一見絵地図か鳥瞰図のような、社頭曼荼羅や參詣曼荼羅と呼ばれるものもあります。このような神道曼荼羅のうち、白山のすがたと神々を描いた一群が「白山曼荼羅」と呼ばれています。

白山の神が最初に描かれたのは、実は比叡山と関係

の深い日吉山王神社の神々を描いた「山王曼荼羅」です。日吉神社の主要な7社(上七社)の中に「客人神」と称される白山神が祀られていることに依ります。展示では岐阜県長瀧阿名院の山王曼荼羅をご紹介します。

白山神のおすがたとして、もっとも古く・華麗な石川県白山比咩神社の白山三社神像(重文)が登場します。室町時代以降白山曼荼羅として三所神・六王子・三眷属と、泰澄二行者が描かれたいわゆる白山垂迹曼荼羅が定形化します。白山曼荼羅は、山王曼荼羅の影響を受け構成されたと考えられますが、白山姫神の図像等に独自性が強調されています。

一方、本地仏曼荼羅として知られる岐阜県長蔵寺本は豊原寺ゆかりの資料として貴重です。白山ゆかりの本地仏としてもっともよく知られる越前町大谷寺の三所権現坐像(県文)や、姫神と本地仏が合体したような越前町八坂神社の十一面女神坐像(県文)等もご覧頂きます。

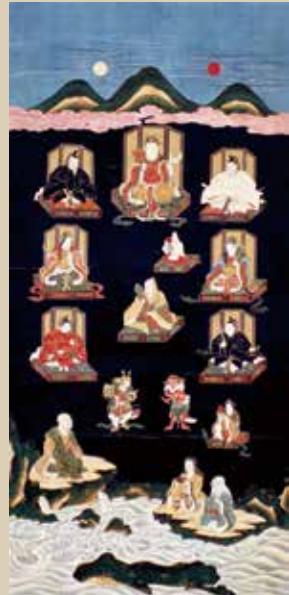
白山信仰のエッセンスを凝縮した白山曼荼羅を軸に、その図像的特色に触れつつ、それらが伝来した社寺と白山信仰との関係についても考察していきます。2017年は泰澄が白山を開いて1300年の記念の年です。今回の展覧会はそのイベントとして、白山信仰への理解を深める第一歩として頂ければ幸いです。 (河村健史)



重文 絹本着色白山三社神像
(石川県白山比咩神社)



県文 十一面觀音菩薩坐像
(三所権現坐像のうち) (越前町大谷寺)



県文 木造十一面女神坐像
(越前町八坂神社)

秋期企画展 白山曼荼羅 -描かれた神々と觀音信仰-

開催期間 平成26年10月25日(土)～11月24日(月・祝) 休館日 11月12日(水)

観覧料 一般 500円 大学・高校生400円 小中学生・70歳以上の方250円 ※20名以上の団体は2割引

福井空襲写真アルバム (1点／37枚)

[法 量] 縦 36.6 × 横 28.0 × 厚 3.0cm

[撮影時期] 昭和20年(1945)7月19日以降

平成25年（2013）、福井市内の民家で見つかった福井空襲（昭和20年7月19日）を記録した写真アルバムです。加えて、当館では、このアルバムの写真と同じ空襲写真群を所蔵しています（「ケリー氏旧蔵写真コレクション」）。占領軍の一員として福井に駐留した米国軍人、ジョセフ・ケリー氏が持ち帰ったものです。じつは、ケリー氏旧蔵写真コレクション入手の時点で、福井県立博物館（当時）学芸員・笠松雅弘と福井新聞社とが行った調査で、撮影者として川崎紀雄氏が挙げられていましたが、確定には至りませんでした。それが、このアルバムの発見により撮影者と撮影の状況が明らかになり、さらに新しい事実もわかつてきました。

まず、アルバムと写真を見てみます。このアルバムには、福井空襲に関連する写真34枚が収められています（残る3枚のうち、2枚は空襲前の市街地、1枚は福井震災後の航空写真）。内訳は、空襲のさなかの写真が9枚、空襲後の写真が25枚です。アルバムの最初のページには、撮影した人物の手記（昭和21年[1946]7月20日付）と、「京都国防写真隊」の隊員証が貼られています。隊員証には隊員の氏名と年齢、顔写真が示され、昭和20年1月26日から1年間の有効期限が記されています。これにより、撮影者が「京都国防写真隊」所属の「川崎紀雄」氏と判明しました。川崎氏はカメラマンで、福井市内で写真館を営んでいました。国防写真隊は陸軍が民間のカメラマンを組織したもので、福井は京都師団に属していました。

また、手記には「愛機ライカをしっかりと抱きて」「火炎の^{かえん}巷^{ちまた}へ飛び出した」と書かれており、「ライカ」（ドイツ製のカメラ）が使用されたこと、空襲の始まりとともに撮影が開始され、現場へ赴いた状況がわかります。

では、アルバム写真と「ケリー氏旧蔵写真コレクション」

を比較してみます。共通する写真28枚を比べたところ、以下のような事実がわかりました。

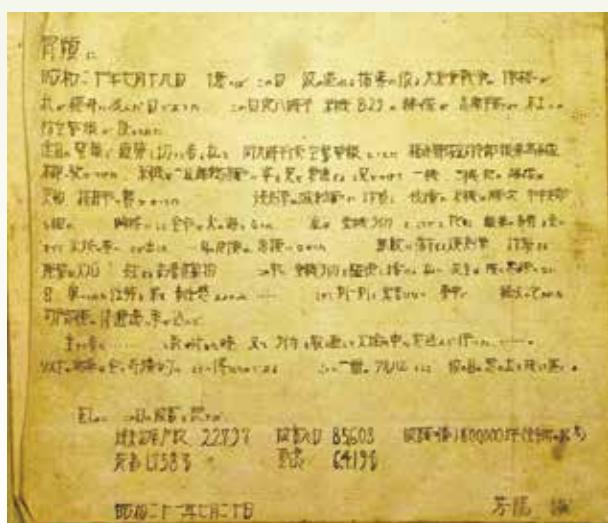
まず、フィルムの傷が同じ場所にあることから、これらの写真は同じフィルムからの焼付と判明しました。しかし、アルバムの写真のうち26枚は約255×210(mm)と大判でプリントされ、正方形に近い形に調整されています（35mmフィルムは4:3の長方形）。そのうえ、フィルムの傷やゴミも修正されていました。

これらの点から、この写真アルバムは多くの人に見せるために作られたと考えられます。実際に、手記の日付と同じ時期、昭和21年7月19日から25日にかけて、福井市会議事堂で「復興展覧会」が開催されていたことがわかりました。当時の新聞記事に、「戦災前後の全市景をはじめ戦災当時や復興スナップなど写真が約三十点」（昭和21年7月19日付福井新聞）が展示されたとあります。これらは当アルバムの写真を指すと考えいいでしょう。展示了とすれば、写真の大きさや、手記が昭和初期の広告に似た字体で書かれていることにも説明ができます。

昭和21年当時、日本は連合軍の占領下にありました。そうしたなか、米軍による空襲被害を記録した写真を公開した背景には、記憶を風化させまい、惨禍を繰り返すまいという信念があったのではないかでしょうか。

現在、撮影フィルムの所在は不明です。占領軍に収集され、処分された可能性もあります。当時、ケリー氏は占領地の情報収集を担当しており、その関係でフィルムの処分の前に写真をプリント・入手できたのかもしれません。

戦後長く日米に分かれ、ふたたび福井に戻ってきた福井空襲の記録写真。撮影した人とその思いも含めて、後世に引き継いでいかなければなりません。（瓜生由起）



手記（特殊な書体で書かれている）



「大和百貨店の内部」（アルバム記載のキャプションによる）

墨書銘のある桶

今回紹介する資料は江戸時代の墨書銘のある桶2点です。鯖江市落井町にある江戸時代に庄屋を務めた家が所有していたものです。まだ調査中の段階ですが、管見では県内にこのような桶に年号が書かれている例はそう多くありません。

これらの桶は米の保管用に使われたと伝わっています。長期の貯蔵用ではなく、一時的な保管に使われたのではないかと考えられます。

桶の大きさは、最大径55.0cm、高さ37.5cmと、最大径72.5cm、高さ34.0cmです。前者を桶A、後者を桶Bとします。

2点とも側板と底板はいずれも木製で、材は針葉樹と思われます。^{たが} 箍は竹製です。

^{まさめ} 桶Aの側板は柾目で、幅が10cm前後のものが17枚使用されています。また、底は一枚板で最大径が47.3cmです。竹製箍4本で締められています。最上部の箍は底から30cm、他の3本は8cmの位置でまとめて締められています。側板、底板とも白木であり、漆などを塗った形跡はありません。虫損が側板には多少ありますが、底板には見えません。側板の内側の底板から約20~25cmの間が少し黒ずんでおり、何かを入れた痕跡が認められます。

桶Bの側板も柾目ですが、幅は大小さまざまです。狭いもので幅3cmほど、広いもので幅11cmほどの中があります。

桶A [延享2年銘] 最大径 55.0cm 高 37.5cm

桶B [文化7年銘] 最大径 72.5cm 高 34.0cm

り、33枚の板が使用されています。底板は6枚で構成されています。こちらも幅は不揃いです。箍は3本、底から26cm、13cm、6cmの位置で締められています。全体に漆もしくは柿渋のようなものが塗られています。箍の下は塗られておらず、箍を締めた後に塗られたことがわかります。側板、底板とも虫損が目立ちます。この虫損は材質の違いを示すのではないかと思われます。使用された痕跡はわかりません。

では、墨書銘を見ていきましょう。

それぞれの桶の底板の裏には次のような墨書があります。

桶Aには

「延享二年／丑五月／弥五右エ門」

(※「享」は「なべぶた」であるが、「うかんむり」となっている)

桶Bには

「文化七午二月 弥五右衛門」

とあります。延享2年は1745年、文化7年は1810年で江戸時代の年号です。製作、または購入された年号と考えられます。併記されている「弥五右エ門」はその家の屋号です。所有を示していると考えられます。

ただ、墨書銘がある理由や製作場、購入した商店、入手経路などの詳しいことはわかっていないません。これからも調査が必要です。

今回紹介した桶のような墨書銘のある資料は、数多く収集することで、製作技術の変遷や技術の伝播などが分かるようになります。

(川波久志)



桶A



桶B



敦賀中橋町牛腸覚録

[法量] 縦6.0×8.5cm

[時代] 慶応3年(1867)

「敦賀まつり」として現在に受け継がれる氣比神宮祭礼の山車曳行は、江戸時代には毎年8月3日・4日に行われ、敦賀の12の町が東西6町ずつの組に分かれて隔年で曳いていました。祭礼を運営する牛腸番町(当番町)はこの12の町が毎年順番に務め、牛腸番町の中で選ばれた牛腸当家宅ではその年の山車曳行の順番をくじ引きで決める牛腸祭が5月16日に執り行われました。

ここに紹介する資料は、幕末期の氣比神宮祭礼に関する古文書で、最近、新たに確認されました。慶応3年(1867)に敦賀中橋町の肝煎(町役人のこと)の立石屋与八が作成したもので、上下巻に分かれ、上巻はさらに一・二・三の3冊、下巻は1冊の計4冊からなります。1冊の法量は、およそ縦6.0cm×横8.5cmと非常に小さいことが特徴です。内容は、牛腸祭や祭礼両日の山車曳行の段取りを中心に、準備段階から祭礼後の会計処理まで、牛腸番町に必要な事項が詳細に書き込まれています。つまり、牛腸番町が回ってくるのに備えて町の肝煎が手元に置いた祭礼用のマニュアルといえるでしょう。江戸時代の牛腸祭や山車曳行に関する町方の古文書は、東浜町・船町・金ヶ辻子町の3町で確認されていましたが、本資料はこれまで見つかっていなかった中橋町の貴重な記録です。当時、同じような帳面を12町の肝煎がそれぞれ所持していた可能性もあります。

本資料の内容から判明する興味深い点をいくつか挙げてみましょう。山車を出す東組は中橋町・唐仁橋町・東浜町・御所ヶ辻子町・東町・浜嶋寺町の6町で、西組は

船町・鵜飼ヶ辻子町・金ヶ辻子町・西町・観世屋町・西浜町の6町でした。本資料によれば、牛腸番町は12年に1度順番に回ってくる当番で、未年は中橋町、申年は船町、酉年は唐仁橋町と、東西の組で交互に務めるように定められていたことがわかります。

牛腸番町では、早くも1月24日に牛腸当家をはじめとする13人の役員が決定され、牛腸祭のちょうど1か月前にあたる4月16日には、その年に山車を出す6町の肝煎が集まる「前寄」が開かれました。5月16日の牛腸祭を経て、7月18日に祭礼中の必要経費などを6町で相談する「小金割」が開かれた後、山車の組み立てに使用される藤やなる(結束材、ネソとも呼ぶ)の調達、神の依代である松の伐採などの準備が進められました。さらに祭礼後、8月8日には祭礼が無事に終わったことを祝い、12町の肝煎が河端氏(氣比神宮の社家)宅に集まる「十二町寄」が、8月11日には会計処理を行う6町の「勘定寄」がありました。こうした祭礼前後に各町の肝煎が集まる寄合は、その年の牛腸番町が主催する形で開かれました。なお、本資料では山車について、8月3日に個人や数人の組で出す山車を「ねりもの遼物」、8月4日に6町がそれぞれ出す山車を「おおやま大山」と呼んで区別しています。

これまで江戸時代の氣比神宮祭礼に関しては、牛腸祭を催す牛腸当家の役割が注目されてきましたが、本資料に示されるように、12年に1度回ってくる牛腸番町の一大行事でもあったといえるでしょう。

(久角健二)



牛腸覚録 全4冊



牛腸覚録 下 (部分)

北陸本線における戦後食堂車の復活について

当館には、昭和初期～30年までの旧日本国有鉄道旅客課が関係した、駅構内営業及び列車内営業関係文書が多数収蔵されています。

その内容は構内営業(駅売店)に始まり、食堂車営業、車内販売営業、それに対する旅客からの苦情など、地域的には全国を網羅する、極めてバラエティーに富んだ内容であり、本資料群を通観することにより、構内営業や列車内営業の運用について理解することができます。

本稿では、戦前に営業を開始したものの、戦争により廃止され、戦後復興の中で復活した北陸本線における食堂車営業について紹介します。

北陸本線における列車食堂の営業は、大正 15年8月15日に行われたダイヤ改正時に、神戸～青森間に新設された急行 505・506列車に和食堂車が連結されたことを初めとします。この時の神戸～青森間の所要時間は 25時間 55分でした。この列車は比較的短命で、昭和4年9月15日のダイヤ改正により廃止されてしまいましたが、この時に新たに大阪～青森間に急行 501(青森行き)・502(大阪行き)列車が設定され、この列車に和食堂車(形式名:スン37形)が連結されました。501・502列車は、北陸本線を走る唯一の食堂車を連結した優等列車として、戦前の定期走り続けました。

昭和 12年に始まった日中戦争、そして 16年 12月 8日に太平洋戦争が始まると、鉄道輸送は軍事輸送が中心となり、18年 2月 15日には臨戦ダイヤ、18年 10月 1日には決戦ダイヤへの改正があり、その後も 19年 4月 1日、同年 10月 11日に、決戦非常態勢に伴うダイヤ改正が行われています。そして、その度に優等列車の削減や、優等車両などの連結が中止されています。

このような流れの中で、北陸本線を走る 501・502列車も例外ではなく、19年 3月で食堂の営業が中止され、食堂車(スン37形)は、少しでも多くの客が乗車できるようにと、料理室を除いて3等客室に改造されてしまいました。

昭和 20年 8月 15日に終戦を迎えると、鉄道輸送の中心は、日本を占領した米軍と英連邦軍のための占領軍輸送と、旧日本軍の復員輸送に大きく様変わりしました。特に

前者は、状態の良い車両を次々と接収して専用列車を数多く走らせ、その中に食堂車を連結し営業を行いましたが、占領軍専用列車のため、日本人の利用はできませんでした。

戦後、日本人が利用できる食堂車の復活は昭和 24年 9月まで待たなければなりませんでしたが、北陸本線での食堂車復活は更に遅く、昭和 28年のことでした。

戦前に大阪～青森間を食堂車を連結して走った急行 501・502列車は、戦争が激化した昭和 19年には普通列車に格下げにはなったものの、大阪～青森間の運転は継続されていましたが、石炭事情が悪化した昭和 21年になると廃止されてしまいました。

戦後の北陸本線における大阪～青森間を結ぶ急行列車の復活は、昭和 22年 7月 5日に運転が開始された 507・508列車でしたが、この列車は 25年 11月 8日の改正で、501・502列車に変更され、ここに戦前からの伝統ある列車番号を持つ急行列車(後の特急「日本海」の前身)が復活しました。

昭和 27年 6月 9日に国鉄旅客課長名で立案された「車内販売営業規正について」では、車内販売の品目を「弁当、湯茶、及び名産品を主体」とし、販売時間と回数を以下のように決めています。

「イ. 食事時間において弁当類

ロ. 早朝と食事時間に湯茶

ハ. その他の時間、菓子、果物、飲物

大阪～青森 501、502列車 5回(販売回数)

とし、食堂車の連結が無い 501・502列車での長距離客への供食については、5回の車内販売での対応で便宜を図っていることが、本資料からわかると同時に、車内販売の回数までを国鉄がコントロールしていたことがわかる貴重な資料です。

上で紹介した車内販売文書が立案された2ヶ月後の8月8日には、「新規列車内食堂営業区間にに対する営業承認願の供覧について」が旅客課長名で供覧に回されています。

本文は、食堂車の営業を担当していた日本食堂株式会社取締役社長名で、国鉄営業局長宛てに出されたものであり、関係ヶ所を抜き書きすると、

「本年度に於て相当数の食堂車の改造及び新造があります由洩れ承りましたが(中略)羽越線五〇一、二列車(後略)」

となっており、その意味するところは、501・502列車に食堂車を連結する際は、日本食堂に担当をさせてほしい。というもので、昭和27年8月の段階で、国鉄の構想として日本海縦貫線という長距離を走る501・502列車に食堂車連結の構想があったことを知ることができます。

上記資料に見える501・502列車への食堂車連結の具体的な動きは、しばらく凍結の状態でしたが、それが具體化するのは、昭和28年6月2日立案の「新規列車内食堂営業の開始について」により知ることができます。

「来る6月15日から、本州裏縦貫大阪、青森間急行第501列車及び第502列車に食堂車(半車)を連結し、新たに食堂車営業を開始することとなつたが、これが営業を日本食堂株式会社に担当させることとし、次案のように取り運びたい。(以下略)」

これにより、以前より待ち望まれていた501・502列車での食堂車営業が昭和28年6月15日からあり、使用された車両は半車(車両の半分を3等客室、半分を食堂としたもの)の車両で、営業は前年に出された要望書に沿った形で日本食堂株式会社であったことがわかります。

昭和28年6月16日立案の「新規列車内営業の開始について」は、6月20日から営業を開始する東京～博多間の急行33・34列車、及び上野～青森間の急行204・205列車に関する文書ですが、付属資料として当時運行されていた食堂車に乗務していた人数が各列車ごとに記されている興味深い資料です。それによると、北陸本線を走る501・502列車は、会計掛1、調理掛1、接客掛2、配膳掛1の合計5名による乗務であったことがわかります。

参考までに記すと東京～大阪間に運転されていた特急1・2・3・4列車の場合は全車食堂で、指導掛1、会計掛1、調理掛2、接客掛4、配膳掛2の合計10名の乗務でした。

本資料に掲載された食堂車営業32列車のリストによると、半車食堂車は5名、全車食堂車は7～10名の乗務であったことがわかります。

昭和28年7月4日立案の「新規営業者に対する列車食

堂営業の承認について」は、新規に帝国ホテルを食堂車営業に参入させるのですが、付属資料として「食堂車使用状況」が付いています。本付属資料は食堂車の運用状況をまとめたのですが、その中に501・502列車のものも以下のように記されています。

「半車 スハシ 3両 501・502列車 使用車両3配属車両4」

鉄道に詳しくない方には、一見したところ意味不明に思われるかもしれません、この資料の意味は「501・502列車用には、スハシ形式の半車食堂車が4両配備され、そのうち3両が使用されている」というものです。つまり501・502列車は、常時3両の食堂車を使用し、他に1両の予備車を持っていたことになります。スハシ形式と記された車両は、スハシ38形101～104(写真参照)のこと、昭和28年に国鉄旭川工場で食堂車への復元改造(元々、半車食堂車スロシ38形であったが、戦時改造で食堂部分を撤去し一般客車のマハシ49形になっていた)を行った車両でした。

以上、北陸本線における食堂車復活の流れについて、当館所蔵資料から時系列に沿って紹介しました。

この時期の国鉄では、食糧事情が徐々に改善されてきていることから、長距離列車での乗客サービスの1つとして食堂車の営業復活を急いでいたものの、財政上の理由から昭和28年度の食堂車の新製は1両もされませんでした。そして、その救済措置的な方法として考え出されたのが旧型車両改造での半車食堂車で、501・502列車にもそれを充当しました。

国鉄は、昭和28年度末には、全車42両、半車25両の合計67両の食堂車を保有し、占領軍専用列車8列車、一般旅客列車26列車で営業を行っていますが、この本数は戦前最盛期の半数に過ぎませんでした。戦後8年を経過しても、鉄道輸送におけるサービスの質的向上が、まだまだ途上であったことをこれらの資料は示しています。

(水村伸行)



スハシ38

博物館日誌 (平成26年3月～平成26年9月)

3月

- 8日(土)～4月6日(日)
文化財公開展「敦賀西福寺の宝物
淨土曼荼羅と経典の美」(特別展示室)
写真展「古写真によみがえる
西福寺と敦賀」(エントランスギャラリー)
19日(木)
南越前町教育委員会来館(資料調査)
22日(土)
ふくい歴博講座「福井市美山地区にみる
神仏習合のすがた」(研修室)

4月

- 14日(月)
ミュージアムカフェ「歴博茶房
時めぐる、カフヱー。」オープン
19日(土)～6月1日(日)
写真展「モノ売る人びと」(エントランスギャラリー)
26日(土)～6月1日(日)
企画展「なつかしの学校行事」(特別展示室)

5月

- 8日(木)
坂井市教育委員会来館(資料調査)
17日(土)
ふくい歴博講座「明治時代の福井の写真師」(研修室)
20日(火)
北名古屋市歴史民俗博物館来館(資料調査)
27日(土)
福井県立若狭歴史民俗資料館(資料借用)

6月

- 2日(月)～11日(水)
燻蒸休館
12日(木)～7月15日(火)
写真展「若狭のまつり」(エントランスギャラリー)
13日(金)
北名古屋市歴史民俗博物館来館(資料貸出)
19日(木)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料貸出)

7月

- 1日(火)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料貸出)
10日(木)
三原市教育委員会来館(資料貸出)
11日(金)
福井県立こども歴史文化館来館(資料貸出)
18日(金)～8月31日(日)
特別展「敦賀湊と三国湊」(特別展示室)
写真展「古写真にみる港町の情景」
(エントランスギャラリー)

7月

- 19日(土)
ふくい歴博講座「湊町のまつり」(研修室)
20日(日)
昭和体験「畠屋用自転車(サイドカー)に乗ろう!」(正面中庭)
22日(火)
福井大学教育地域科学部社会系教育講座来館(資料調査)
27日(日)
バスツアー「湊町・三国と北前船船主の館」

8月

- 1日(金)～6日(木)
博物館学実習
3日(日)
キッズミュージアム
「和船のペーパークラフトを作ろう!」(研修室)
5日(火)
立教大学博物館学講座来館(博物館学実習)
7日(木)
株式会社ホーユー来館(資料調査)
8日(金)
イタリア国立東邦学研究所来館(資料調査)
17日(日)
昭和夏遊び「しょうのう船を作ろう!」(正面中庭)
19日(火)
あわら市郷土歴史資料館来館(資料借用)
22日(金)
滋賀県立安土城考古博物館来館(資料貸出)
23日(土)～9月23日(火・祝)
重要文化財指定記念
「林藤島遺跡出土資料展」(歴史ゾーン)
24日(日)
バスツアー「港町・敦賀と県立若狭歴史博物館」
27日(水)
博物館運営協議会(研修室)
立教大学博物館学講座来館(博物館学実習)
30日(土)
大谷大学来館(資料調査)

9月

- 7日(日)
戦国史研究会来館(資料見学)
11日(木)～10月5日(日)
企画展「越前に由利公正あり
龍馬の手紙に記された三岡八郎とは」
(特別展示室)
収蔵資料展「新収鉄道資料」(特別展示室)
11日(木)～10月21日(火)
写真展「鉄道写真」(エントランスギャラリー)
11日(木)
京都女子大学来館(博物館実習)
20日(土)
ふくい歴博講座「だるま屋・屋上遊園地」(研修室)

[編集・発行]

福井県立歴史博物館

〒910-0016 福井市大宮2-19-15 Tel0776-22-4675
<http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/>

jci ュージアム
No.49 平成26年9月26日発行